

I

令和3年度
国語
現代文
A
B

(文学部)

令和3年度入學試験問題
解答紙
(4枚のうち1枚目)

受験番号

I

受験番号

受験番号

一 (45点)

<p>問1 原初の人間にとって神でもある野生動物としての鹿の身振りなどを模倣しながら、精霊たちの住む領域へと入り込み、神や精霊と交流し、世界を蘇らせる所作のこと。 旧石器時代の人類は、内臓感覚を自らが入り込む洞窟へと外化し、その洞窟の壁面をみずからの生命体としての記憶を刻印していく場として了解したということ。</p>	<p>問2 海の民が、全身体的な感覚を通じて星の配置を読み取り、それを自らの方向感覚に投影したり、占星術師が、天体運動を自らの身体や世界像と結びつけたりすること。</p>	<p>問3 文字以前の人間が身体感覚によって自然界を模倣することで文化を創造してきたことが、人間の幼少時の模倣的想像力を用いた自在な模倣遊戯の中で繰り返されているということ。</p>	<p>問4 擬声語や擬態語の中に色濃く残されている模倣的な肉体的性・物質性や、手で書かれた文字の中に潜在する身体的模倣の能力のこと。</p>	<p>問5 現代社会がデジタル化し、人類が自己の身体や天体の星や自然を模倣することで文化を創造してきた身体的な模倣の感覚が失われ、文字が情報伝達のための記号的符牒にすぎなくなっているから。</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------

採点

採点

2

合現 B
総装文 A
語代典
國現古

(文学部)

令和3年度入學試験問題
（4枚のうち2枚目）

受験番号

2

受験番号

二 (30点)

採点

--	--

問1	①	たいそう驚きあきれるぐらい
	②	教え申し上げるが
	③	我慢できず
問2	下二段動詞「かる」未然形＋尊敬の助動詞「さす」連用形＋四段動詞「たまふ」連用形＋完了の助動詞「ぬ」連用形＋過去の原因推量の助動詞「けむ」連体形	
問3	父兼家の六十歳の祝いの場で福足君に舞を舞わせようとして、あれこれ苦心したのに、当日になって福足君が、舞台の上で舞いたくないとだだをこね、髪をかきむしり、衣装を引き裂いたことが原因で、茫然自失の状態となった。	
問4	並外れた悪童である福足君が、親の言うことをきいてきちんと舞うはずがないと思ったことだよ。	
問5	ア	父大臣は言うまでもなく、他人でさえ、むやみに感動し申し上げた。
	イ	道隆の、舞台上に上り、福足君を腰にひきつけ自ら舞うことで、福足君の恥を隠し、父兼家の祝いの場を盛り上げるといふ、人に対して情け深くふるまう態度。
問6	『栄花物語』は編年体で叙述され、道長の栄華を賛美することに終始するが、『大鏡』は紀伝体で叙述され、『栄花物語』よりも批判性がある。	

3

国語現代文 A
国語現代文 B

(文学部)

令和3年度入学試験問題

解答紙

(4枚のうち3枚目)

受験番号

3

受験番号

三 (30点)

採点

--	--

問1	① 早く早く	② 二つとないほどすばらしい
	お前自身を安楽に過ごさせよう	
問2	B たとえ殺されるとしてもよそへ行くつもりはない	
	C 老婆よ、後悔するな	
問3	老婆の小屋がたまたま陣屋を造営する妨げとなったことで、そこを立ち退く代わりに、よい土地と家を与えられ、また、老婆と一人息子の生活が生涯にわたり保障されて、後顧の憂いなく極楽往生を願うこともできるから。	
問4	先祖代々の大事な土地家屋から離れることを思えば、たとえ代わりの土地家屋をもらい、どんなにすばらしい生活ができるとしても、老婆にとっては、まったく価値がないということ。	
問5	奉行人の提示した条件を受け入れることなく、むしろ自分をだますものと言い放ち、地団駄を踏んで今にも泣きそうなほどに奉行人に自分の思いを訴えた言動。	
問6	国命として奉行人の提示する好条件を受け入れることなく、拒む老婆の言動を頑固で愚かだと評す一方、老婆の要望通り縄張りが行われたものの、結局はその際に田畑が踏み荒らされてしまい、奉行人の言う通り、後悔することになって老婆が悲しむのはもつともだと評している。	

受験番号

受験番号

四 (45点)

問7 (イ) (エ) (ク)	問6		問5				問4	問3	問2		問1	
	㉞ つひに	㉟ より	に 違 い な い か ら 。	人 賢 者 の 文 章 と 違 っ て ほ ぼ 消 滅 す る	一 生 を か け て 書 き 記 し た 文 章 が 、 聖	昔の聖人や賢者の書いた文章が減びないことに思いを寄せない者はいないが、	草木や鳥獸、人々と同じく、言葉もいづれ滅んでしまうので、頼りにならない ということ。	(2) 書物を著す人が精神と体力を注いだ労力に比べると	(1) 方 _下 其用 _ニ 心与 _ラ 力之 _上 労	(2) 著書之士	(1) そのひとあげてかぞふべからず。 (う)	

採点